

## 5、フォスコ・マライーニの果たした役割

フォスコ・マライーニは、1941年、12・8一斉検挙の前に札幌を離れ、京都帝国大学（京大）のイタリア語教師に赴任していた。したがって冤罪事件との直接の関りはないが、宮澤弘幸やレーン夫妻らと相互に深い影響を与え合っており、事件の真相解明に欠かせない存在となっている。

1912年（明治45）11月15日、イタリア・フィレンツェ生まれ。文化人類学者、登山家、写真家、文筆家、そして文化交流事業家として多彩な顔を持ち合わせているが、日本へは1938年（昭和13）12月、国際学友会（本部・東京）の日伊交換留学生として奨学金を得、妻子共々やってきた。

留学の目的はアイヌ民族研究にあり、本人の希望で、北大を留學先に選んだ。だが、当時の北大には適応する講座がなく、アイヌ民族の骨格研究で知られた同大医学部解剖学教室に無給助手の資格で席を得た。同時にレーン夫妻らの知遇を得て、心の会の一員ともなり、自由な視座と行動力で、奨学金満期の1941年（昭和16）4月まで、宮澤ら学生に鮮烈な影響を与えた。

とくに弱者、虐げられた人たちに心からの目が届き、半面、海外の新聞を取り寄せるなど国際情勢にも明るく、考え方を異にする人たちとも交流できる自由人。また、学生たちと年齢が近いこともあって兄貴格となり、自然体の言動自体が手本になった。

宮澤弘幸とは、登山、自転車旅行などで野外活動も共にし、い

つとき自宅に居候もさせている。宮澤が検挙された後も遠くから心の支援に篤かった。宮澤が釈放されたあと、自分の方から消息を求めて訪ね、旧交を温めたのはマライーニだけだった。

1943年（昭和18）9月、イタリアが連合国に降伏し、日独伊同盟から脱落してからは敵国人扱いとなり、名古屋の外国人收容所に送り込まれてからは辛酸を舐めたが、親日姿勢は変わらず、帰国後も訪日を重ね、『オレ ジャポネジ』（日本語訳『随筆日本—イタリア人の見た昭和の日本』松籟社刊）写真左下）を著している。その初版の序文で、宮澤弘幸について次のように書いている。

（宮澤弘幸は）盲目的なまでに残酷な日本の軍国主義の犠牲となつてしまった。わたしにとってヒロユキは、日本精神のもっとも高貴な、この地上で最も貴重な側面を表していた。



愛知県・廣濟寺にある在日墓  
(24頁参照)



## ●フォスコ・マライーニ「最後のことば」

フォスコ・マライーニは、2004年6月7日、フィレンツェで91歳の生涯を閉じた。6月10日、フィレンツェで行われた告別式に際して、フォスコは「親しき友人諸氏へ」と題した「最後のことば」を残した。国家権力の弾圧を経験した文化人類学者としての透徹した思想である。その一部を紹介しておきたい。

### 親しき友人諸氏へ

わたしは神の啓示 (Revelation) という問題を真剣に考えはじめました。そしてその後、「月から地球にメッセージを伝えるために来た月界人」ということを意味する「CIEUVI」という語を造語したのですが、このような立場、言い換えると真の意味で偏見から自由な精神の持ち主からみて、この「啓示」というものは、なにもイエルサレムにおいて発せられたかの有名な三つの啓示に限定されるものではないと考え始めたのでした。

わたしはこうした疑問を抱きつつ、それぞれに互いに距離を保った諸文明に向けての旅をし、それにじかに触れる経験を通じて、はつきりと次のように思うようになったのです。

つまり、ある特定の場所、特定の時点で、特定の人物に開示されるところの「局在する啓示 (Revelazione Puntuale)」というのではなく、「常在する啓示 (Revelazione Perenne)」というものはあるんだ。それは自然の中でも、日常の人間の世界的なかでも、もし聴こうとするものならいつでも何処でも、神秘的な語り

かけとして受け取られるものであり、じつはそういう宗教的場にわれわれはいる。なにも預言者から聴くのではなく、聴く、見る、読むだけでよい。すべては啓示として、そこに、いつも示されていると。

常在する啓示の中で、わたしは平和と安心とを見いだしてきました。きわめておおくの理由から、わたしは「局在する啓示」よりも「常在する啓示」の方がはるかに優れていると思えたということをおま告白します。

この常在する啓示のもとでは、まさにある啓示を信ずるがゆえに、他の啓示の信者を物理的に抹消することに向かう、あのファンダメンタリスティックの崩壊現象は回避されるはずで、あの恐ろしい出来事はすでに、過去においていくどもおこったことです。十字軍を、アメリカ大陸征服時のあの悲劇を、ヨーロッパを初め各大陸で繰り広げられた宗教戦争を想起するだけでよいでしょう。

常在する啓示という考えのもとでこそ、宗教と科学、人間と自然とのあいだの対立は克服されるはずで、科学はそこでは常在する啓示の探求になり、隠された神との協力のもとで、宗教的営為と一体化するはずで、

常在する啓示こそが、遠き孤島で自足しつつ謙虚に住む人から、高度なる文明中心で最高の知性の高みに達した人にいたるまで、すべての生きとし生ける人類のすべてが、ひとつになることを保証してくれるのです。

「京都大学学士山岳会 ニュースレター No. 32 september 2004」から。全文は同会HP <http://www.aack.or.jp/>